

令和元年度第1回飯田市総合教育会議 会議記録

日時：令和元年7月18日（木）

午前9時00分から午前10時30分

場所：飯田市役所 A301・302号会議室

1. 開 会

（櫻井総合政策部長）

おはようございます。それでは、これから令和元年度第1回総合教育会議を始めたいと思います。

全体の司会は、総合政策部の櫻井が務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。それでは、最初に牧野市長よりごあいさつをお願いします。

2. あいさつ

（牧野市長）

おはようございます。令和になって最初の総合教育会議、このようにお集まりいただきましてありがとうございます。

教育長はじめ教育委員会の皆様方におかれましては、日ごろから飯田市の教育の振興のために大変なご尽力をいただいておりますことに改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、この総合教育会議についてはご案内のとおりかと思いますが、平成27年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正されまして、それに伴って設置されたものでございます。

これまで、飯田市教育大綱の協議、あるいは飯田市の教育に関する取り組みや課題についての意見交換、こういったことをこの総合教育会議で行ってまいりました。

北澤教育長職務代理におかれましては、昨年10月に就任されて以来、総合教育会議の出席は初めてかと思いますが、よろしくお願いいたします。

今年度も早3ヶ月が過ぎ、私が年頭所感、あるいは年度初めの所感におきまして述べさせていただきました「地域人教育」につきましても、さまざまな形でこの取り組みが広がっているととらえているところであります。

一旦はこの地域を離れてもまた戻って来られるような人材のサイクルをいかに作っていくかということは全国的な課題となっております、この地域人教育もその一環としてとらえられ、全国にもその輪が広がってきていると見ております。

地域人教育は、地域を高校生の皆さんに理解してもらい、郷土愛を育むことを通じまして将来の地域人材を育成していこうというものでありますが、こうしたことができますのも飯田に地域の力があり、あるいはそれが人々が培ってきた「結いの心」「ムトスの心」というものにつながっているからこそ思うわけでありまして。「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」の実践という位置づけもできるのではないかと思うところであります。

地域人教育は、高校生を対象にする形で広がっておりますが、小中連携・一貫教育や飯田型コミュニティスクールに代表されます小中学校の取り組みもこうしたことに通じるものと思っております、ぜひ今日もそうした議論を深めていければと思っております。

今日は、2つのテーマが用意されております。「学校や教室になじめない子どもたちへの学びの支援」、そして「中学生期におけますスポーツ活動のあり方」。この2つは、どちらも大変大きなテーマととらえ

ておりまして、学校の中だけで完結する議論ではないと思うところであります。

学校と地域が一体となり、子どもたちにとってどのようなあり方が望ましいか、しっかりと議論ができればと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

以上申し上げまして、私からのあいさつとさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

(櫻井総合政策部長)

ありがとうございました。続きまして、代田教育長からお願いいたします。

(代田教育長)

改めまして皆さんおはようございます。本日は、令和元年度の第1回の総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。

今、市長からもありましたけれども、大きく教育制度が改革される中でこの総合教育会議が法律で位置づけられているわけですが、法律で位置づけられたからこの会議をやるということではなくて、この機会を教育行政と市の行政のリーダーである市長と話し合える有意義な活動にする、本当に飯田にとっても貴重な機会だというふうにとらえて議論を進めていきたいと思っています。

来年度、小学校もいよいよ新しい学習指導要領に変わって、今、教育の大きな流れの転換期だというふうに思っています。転換期ということは、大きな課題もいっぱいあるわけで、そうした課題を教育委員会だけで考えるのではなく、市長部局さらには多くの市民の皆さんと議論していくことが大事だと思っています。

私の今年の教育委員会の目標の4文字として、「多事争論」という言葉を掲げさせていただいております。賛成や反対がみんな1つの目標に向かって議論することこそが価値があるんじゃないかなというふうに思います。今日の教育会議も多事争論の場でありたいなと思います。本日はよろしく願いいたします。

3. 意見交換

(櫻井総合政策部長)

ありがとうございました。それでは、意見交換に入らせていただきます。進行は今村教育次長のほうで行わせていただきますのでよろしく願いします。

(今村教育次長)

おはようございます。教育次長の今村です。私のほうで、今日の意見交換の進行を務めさせていただきますのでよろしく願いします。

今日はテーマが2つありまして、「学校や教室になじめない子どもたちへの学び支援」並びに「中学生期におけるスポーツ活動のあり方」ということで、現在行われている市政懇でも話題になったりしていて、私たちを取り巻く重要なテーマだなと思っています。

先ほど、代田教育長から「多事争論」という言葉がありました。牧野市長は、「共創の場」という言葉を使っています。つまり、こういう場でお互い忌憚のない意見を重ねながら、今日結論が出ないかもしれないけれど、お互い気づきを共有して一歩前へ進めていく、共感を得る場だと思っていますので、今日はそれぞれの立場でご意見を重ねていただければと思います。よろしく願いします。

進め方としまして、まず最初に事務局のほうから、その前提となるような状況について、資料説明を

短時間させていただき、その後、それぞれの方から意見をいただきたいと思っておりますので、そのような進め方をお願いします。

(1) 「学校や教室になじめない子どもたちへの学び支援」について

(今村教育次長)

1つ目のテーマについての資料説明を事務局からお願いいたします。

(桑原学校教育課長)

それでは、学校教育課の桑原でございます。よろしく申し上げます。

資料No. 1-1をご覧くださいと思います。不登校児童・生徒数の推移ということで、平成19年度から平成30年度までの推移を棒グラフ、折れ線グラフで示したものでございます。

棒グラフの左側が小学校、右側が中学校の不登校数、それから折れ線グラフは、下が小学校の在籍比、上が中学校の在籍比になっております。

ご覧のとおりでございますが、平成19年度頃と比べれば減ってきてはいるんですけども、ここ3年間くらいは高止まり傾向という状況でございます。いわゆる平成18年、19年度頃の中1ギャップというのが、徐々にではあるかもしれませんが減ってきているのかなということでございます。

その下に、平成30年度の数値だけ紹介をしております。

小中学校の合計では125人で前年比+3、小学校で見ますと42人で前年比+8、中学校は83人で前年比-5という状況でございます。

その下、2番が「不登校の要因」ということで、これは聞き取り調査等による担任の回答で、重複もございますので合計は一致しません。

小学校不登校児童42人の内訳といたしまして、②の「いじめ以外の友人関係」、それから④の「学業不振」、それから⑨の「家族に係る状況」の人数が多いという状況でございます。中学校を見ると、83人の内訳を見ましても、②の「いじめ以外の友人関係」、それから④の「学業不振」、それから⑨の「家族に係る状況」、やはりこの3つが多いという状況でございます。

過去につきましては、このような内訳をちゃんと分析をしたデータがないという状況なんですけれども、おおむねこの3つが多い傾向は変わらないのではないかとこのように思っております。

続きまして、裏面の資料No. 1-2の2ページをご覧くださいと思います。不登校の状況はこういうことなんですけれども、ではどんな取り組みをしているのかということの説明資料でございます。

飯田市における不登校対策「5つのアクション」ということで、太文字の部分、ご覧の5つの取り組みを進めております。

1つ目が「教育支援指導主事の配置」ということで、対象となる児童生徒の状況に寄り添う指導の実現のための教育支援指導主事の配置をしているところで、後ほどご紹介をさせていただきます。

それから、2つ目の「体験学習活動の実施」でございますが、「地育力を生かした体験学習活動の設定による自立を促し、自立を支える指導の具体的実践」ということで、これにつきましては、新たな取り組みを計画しておりますのでご紹介をさせていただきます。

2ページをご覧くださいと思います。こちらは平成31年度の教育支援指導主事の配置組織図でございます。中央部分が学校教育専門幹、それから教育支援指導主事の統括を中心に学校担当の教育支援指導主事13名を配置しております。真ん中の四角のところでございますが、学校担当の支援指導主事

13名を配置し、学校を分担いたしまして、5つのアクションで取り組んでおります。下段を見ていただきますと、不登校や学級不適応、問題行動の改善等、あるいは一番下のところになりますが、不登校児童生徒、保護者への支援を行うなど、指導主事の先生方が学校環境整備を行っていただいているという状況でございます。

3ページをご覧いただきたいと思います。こちらは「児童生徒への登校支援」ということで、未然防止・早期対応をすすめるために、すべての学校・教室で具体的にこういったことを進めましょうという取り組みの紹介でございます。

1は、まずは不登校に関する基本的な考え方を全教職員で確認し合ひましょう。2は、登校しぶりとか不登校への基本的な対応を、これは組織的に全教職員で実践していきましょう。3は、きめ細かく柔軟な個別・具体的な取り組み強化。4は、主なチェック項目ということで、すべての学校・教室で取り組みを具体的に進めていくということでございます。

続きまして、4ページは、先ほど申し上げました「体験学習活動の実践」の本年度新たにやってみようと思っている計画でございます。「夏たいけん活動 みんなおいでよ!」ということで、8月6日でございますけれども2つのコースがあります。「しぜんの中であそぼう」ということで、Aのほうは遠山郷へ行きます。川遊び、それから昼食の後はものづくり講座ということで、「藤つる講座」とか「木工等」を選んで講座を受講していただくというコース。

それから、Bは、「ふしぎのせかいへいこう」ということで、これはエス・バードを会場に、飛行機のシュミレーターとかバーチャル体験、それからものづくり講座ということで、サイエンスショーやホバークラフトづくりをやってみるという取り組みであります。

こちらについては、教育支援指導主事のほうから児童生徒、保護者の方に声をかけていただいているという状況でございます。

続きまして5ページは、平成30年度の教育相談室への教育相談の件数のグラフでございます。

平成25年度からの推移を示したものでございますが、一番左上が「合計」ということで、平成30年度は今までで一番多いという結果。その右の「登校しぶり・不登校」に対する相談がかなり多いという状況でございます。

それから6ページは、追手町小学校と飯田東中学校にある中間教室の年度ごとの通室人数の推移をまとめてグラフにしました。

数字的にはご覧のとおりで、何か傾向がわかるかなあとということで推移を見たんですけども、いろんな児童生徒がいますし、環境も違うということで、この表で何らかの傾向等がわかるというものには結局はなっておりませんが、参考までにご覧いただければということでございます。

簡単ですが説明をさせていただきました。

(今村教育次長)

ありがとうございました。事務局から議論の前提としての資料説明をさせていただきました。

では、ここからは、それぞれの皆さんから発言をいただきたいと思いますので、発言のある方、挙手をいただき、私のほうで指名をさせていただいてという形で進めたいと思いますのでよろしくお願いたします。いかがでしょうか。北澤職務代理をお願いします。

(北澤職務代理)

私はこの教育委員を受ける前まで、ちょうど先ほどの表にありました教育支援指導主事という形で、

学校現場のほうで6年半ほど、長期欠席のお子さんとか学校に不適應のある状況を示すお子さんや保護者に関わらせてもらってきたという経験がありまして、つぶさに学校の先生方の様子とか、長期欠席のお子さんたちの様子などわかっているというようなどころから、若干お話をさせてもらいます。

例えば、この例えがいいかどうかかわからないんですけども、フルマラソンを全員に「4時間でゴールしなさい」というふうになったとき、全員そろって4時間では走りきれないと思うんですね。途中でペースを変えたり、お水を飲んだり、中には歩いて、しばらくペースを整えてそれからまた走り出すとか、当然、ゴールするときのタイムも、4時間よりもっと早い者もいるかもしれないけれど、その倍近くかかる者もいるという。それをこのテーマ1の「学校になじめない子どもたちへの学びの支援」というところに当てはめると、同じように、ゆっくりの子もいるでしょうし、少人数なら何とかなるといいう子もいるでしょうし、学びの場所も、教室もあれば教室以外の場所もある。でも、最後に目指すところは、やっぱり社会的自立という部分では、4時間を切って走っている子も、それから倍近くかかっている子も同じだというふうに私は思っているんです。

それで、じゃあ今学校になじめないでいるというお子さんたちが、家なり、または教室じゃない場所において、何もしないで何も考えないでいるかというところではなくて、やっぱりそのお子さんたちは、そのお子さんたちのペースで本当に考えているし、学んでいるしというのを実感してきました。

いわば、本当にさなぎの状態というか、じっとしているんだけど、そのじっとしている中で実は心の内面では猛烈にいろんなことを感じたり考えたりして学んでいる。ただ、外から見たときには動きが小さいから、なかなか全員で走りましようとなったときには動けないでいるということかなあというふうに思っているんですね。

なので、そのさなぎで止まっている状態なんだけど、それはそれでよしとして放っておいたらやっぱりさなぎは育たない。さなぎではあるんだけど、そこには常に学校の風や、社会の風や、「あなたのことはいつも見ているよ」という風を送り続けることが大切だと思います。

その風を送り続けるためには、やっぱり多様な学びの場所や方法とか、それから、それを見守って風を送り続ける人が必要というふうに思っています。

入り口なのでこれぐらいのところでお話させてもらっておいて、また後ほど、もうちょっと具体的なことでお話させてもらえればと思います。

(今村教育次長)

ありがとうございました。これまでの経験を踏まえた考え方をご意見いただきましたが、ほかの方いかがでしょうか。三浦委員。

(三浦教育委員)

今の話を聞いていて、私も同じようなことを思うところがあります。

定時制の生徒さんの作文を読むことがありまして、また、私の知っている学生で、昔不登校だったよという人の話を聞いたことがあるんですが、その2つの話がちょっと似ていたという、そんな話なんです。

「不登校になったその理由は、自分でもわからない。いじめられていたわけでもないし、嫌なことがあったわけでもないが、ある日突然行けなくなって家で休んでいた。いろんな人たちが声をかけてくれて、それでも動けなかったけど、途中で『何をやっているんだろう』というふうに考えて学校へ行くようになった』と。そんなときに学校に行ったら、いつも声をかけてくれた。うまく返事ができなかった

けれど、涙が出るくらいうれしくて、自分の心が変化していくのがわかった。」と。

別の人ですけれども、定時制の子の作文にも書いてありましたし、私が聞いた子も同じ話をしていたなというところがちょっと驚いたというか。2人の話なので、大きな全体的なデータではありませんけれども、今、職務代理が言われていたように、放っておくということではなく、さなぎをそのままではなくて何かすることによってそれがかえっていくというか、社会的なそういう部分が育まれるんだなあということを感じたところがありました。

また、学校という場所で人が声をかけてくれる。居場所というものも、ただの物理的な居場所ではなくて、自分が認められる、認めてもらえる安心できる場所、そういう場所をつくってあげる。強制的に引きずり込むというよりは、そういった場所も幾つか選択肢があって提供できる、そういった考え方で大事なんだなど、今お話を聞いていて私も思ったところでした。

(今村教育次長)

ありがとうございました。他にはいかがですか。

(伊藤教育委員)

この不登校の話は、2年くらい前、一度総合教育会議でやっていまして、そのときの意見と私はあまり変わらないんですが。

今、不登校で検索すると必ず出てくるような本があります。それがどういう本かという、森田直樹さんという先生なんですけど、コンプリメント、いわゆる褒め言葉ということなんですけれども、いま三浦委員がおっしゃったように、ある日突然動けなくなったと。何で、どうして動けなくなったかという、この先生いわく心に自信がなくなったということなんです。

子どもは体は成長するけれども、心というのはわかるようには成長できないわけなんです。それで、学校へ行く自信がなくなる。あるいは、友達と話す自信がなくなる。それをまずどうしたらいいのかということなんですけれども、この先生いわく、子どもの心のコップがあるんですが、そこに自信の水をいっぱいにしてやること。その自信の水がすなわち褒める言葉、コンプリメントなんです。

そのコンプリメント、どういうのがあるかという、「愛情」と「承認」と言うんですね、その先生は。「愛情」というのは、「あなたがいるからうれしい」とか、「先生はうれしい」とか、そういう言葉。

あるいは、「承認」というのは、その子を認めてあげる。また、能力というのは学力がありますけれども、体力それから性格、あなたにはこういう仕事が上手にできる力があるんだ、あるいは、あなたはこういう優しい心を持っているとか、そういういろんな褒め言葉があるんですけど、そうやって子どもの心のコップに水を常に与えていく。

でも、一生懸命親御さんが水を入れてやっても、学校へ行って一瞬でそのコップの水を空けてしまう。しかし、それでも、帰ってきたらまたそのコップに水を少しずつ入れていってあげる。そうすると、今度はもう少し、1時間くらいできるようになった、半日くらいいられるようになったという、そういうことの繰り返し。そうだと思っても、また元の繰り返しになるけれども、それを親御さんは続けるしかない。

特に、家族構成の事情もありますけれども、母親がその自信の水をあげてあげるのが一番だというふう書いてあるわけです。私もそこに非常に感動するところなんですけれども。

もう1つ、ちょっと違う局面で話しますと、いろんな環境施設をつくる、中間教室なりいろんな施設をつくる。車で例えると、いろんな走行のコースをつくってあげる。これは確かに良いことなんです、

ちょっと表現がよくないかもしれませんが、子どもが車と考えると、子どもにはエンジンがあるんですが、実は燃料がないということなんですね。その燃料を入れてあげると走れる。

ですから、いろんな施設をつくっても、子ども自身はやろうというエンジンを持っていても、燃料がなくてはだめだ。それが、先ほど言った自信の水、それが燃料になるんじゃないかというそういうことです。以上です。

(今村教育次長)

ありがとうございました。心のコップに自信の水を入れてあげるというご意見でした。他にはいかがですか。どうぞ、小澤委員。

(小澤教育委員)

今の伊藤委員のお話も踏まえてなんですけれども、先日の南信州新聞のコラムに4月に行われた全国学力学習状況調査のことについてちょっと触れてくれていたんですけれども、飯田市の子どもの自己肯定感、数字上とても伸びているところがあるようで、自分たちには良いところがあると思うということに対する肯定的な回答がすごく多く、数字が軒並み伸びていると。

それで、市教育委員会は自己肯定感について、「自分は大切な存在、生きていだけで価値があるなど、ありのままの自分を認められる感情が子どもたちに芽生えてきている。『それでいいんだよ』、『あなたはできる』といった声かけの有効性を指摘し、取り組みの推進も伸びの一因と見る」と説明していたというふうに書いてあったんですけれども、その続きに、「向き合う対象は子どもだけでよいのか」と。小児科医の古荘純一先生という方の『『いい親』をやめるとラクになる』という著書の中で、「親の肯定感が低いと自己肯定的に受け止めることができず、子どもを肯定的に受け止めることができなくなる」と訴えていると。子育ての不安やストレス、社会の多様化とか複雑化、それに伴って親の肯定感を高めていくというアプローチもとても大事なのではないかということが書いてありました。

また、話は変わるんですけれども、今朝、支度をしながら見ていたテレビの話です。ある中学校で、男の子が、それまで仲良くしていたんですけれども、ポロッと一言悪口を言ったことによって次の日からクラス全員の子に無視をされるようになった。しばらく過ごしていたんですけれども、ある日からその子に対してひどいメールが送られてくるようになって、その子はもう全然動けなくなってしまった。

どうしようもなくなったときに、お父さんに「助けてほしい」と言ったところ、お父さんはそのひどいメールを書いた子を特定して、学校にも相談し、それから、その子どもさんと親たちと話をし、もう「そういうメールは送らないようにしましょう」と誓約書まで書いた。けれども、やはりそれで終わるわけがなくて、無視が続いて、その子は別室登校が続いている。

先生のほうにも学校のほうにも訴えかけるんだけれども、クラスにアンケートをとると、全員「いじめはない」という回答が出てくる。子どもたちに対して聞くと、「無視はするけれども、それはいじめではない」と。でも、それを受けている子どもにとってはそれはいじめである。

それで、そのお父さんがどうしていいかわからなくて、その送られてきたひどいメールをすべてSNSへあげてしまったんです。

ですので、そのとき親はどうしたらいいかというのが問題になっていて、子どもたちのケアも大切なんですが、親のケアの話。それから、コメンテーターの方によると、先生たちも「おい、仲良くしろよ」で済む問題ではなくて、一人ひとりに向き合って話をしなければいけない。ですが、先生たちもとても忙しくて、両方から話を聞くことができずにうまく進めていけない。

スクールカウンセラーの方々も入ってくれて一生懸命やるんですけども、それは少しずつ丁寧にやっていくので、親としては「もっと早く。もっと早く仲良くさせてほしい。」という気持ちがあつてうまくいっていないという話がありました。

なので、やはり子どもたちに働きかけるのも大事ですが、先ほどあつたように、親御さんへのアプローチというのも引き続き大切なので行っていったほうがいいのかなあと思いました。以上です。

(今村教育次長)

ありがとうございました。新しい視点で、親の自己肯定感、あるいは大人の対応ということでご意見だと思います。ほかにはいかがですか。どうぞ。

(代田教育長)

今、小澤委員のほうから飯田市の教育の取り組みということで、自己肯定感が上がっていると。これは、教育委員会としても意識してこの数字を見ています。

というのも、第2次教育振興基本計画のビジョンは、「地育力による 未来をひらく 心豊かなひとづくり」。この「心豊かな」というのをもう少しわかりやすくすると、自分のことを自分としていいと認める、まさに自己肯定感を育む。さらに、自分だけがいいということではなくて、相手のこともお互いに認め合える相互の承認。

自己の確立と相互の承認が「心豊かな」の大きなテーマであるということを掲げていますので、これを学校教育の中でもしっかりやっていこうというのは第2次教育振興基本計画の中での大きな取り組みでした。自己肯定感や、さらにこの数値の中には内発性というものもあつて、これは伊藤委員からありました自分の「エンジン」ですが、こういうものを育んでいかないとだめだと。要は、学力テストというのは認知スキルと言われている点数に出る能力であります。むしろ、こういった自己肯定感や内発性、数字には表れないんだけど内に秘めた数値というのをしっかりと見ていこうということの一つの結果だというふうには思っています。

ただ、そういうことを学校で取り組んでも、なかなか不登校自体の数字が減っていかないというのが現状かなあという認識です。

(今村教育次長)

ありがとうございました。他の方がいいがでしょう。重ねて「それについてはこう思う」ということでも結構です。どうぞ。

(三浦教育委員)

不登校といいますか、学校に足が運べないといった子どもさんたちの対策について、難しい原因、理由は、さまざまなことがあるのかなというのは感じるところです。

今回、いじめというのは少なかったですけど、人間関係、コミュニケーションが保てないと。そうなってくると、やはり発達障害というようなところももしかしたら原因とされているかもしれないし、学業不振にあつてもそういった点があるのかもしれない。

家族の問題では、先ほどの親の自己肯定感といったような問題であつたり、この資料の中でも、相談内容に子育てについての相談というのが多かったところを見ると、その育児をしていくという部分が原因で子どもにそういった反応が出ているのかもしれないといった形で、原因がさまざまであるので、対

策としても、「じゃあこれがびったり全部当てはまるだろう」というふうにならないのがこの問題の1つの核にあるんじゃないかなと思います。

なので、いろいろなところで個別のいろいろな対応、そして、そこに合わせたエネルギーを蓄える時間を見てあげる。または、エンジンがかかってきたら自分を認めてもらう、そういう場所を幾つか提供して、一步一步その子が外へ出て行かれる、そういった支援って大事だなと。

目的は、やはりどういう状況であっても社会的な力、社会に出る力をつけるということと、もう1つは、基礎学力をきちんとつける。この2点を目標にして、結果がそこにあって、そういったいろいろな対策を個別に計画していけるということがいいんじゃないかなと思います。

職務代理、そういった対応を今までされてきた中で、具体的に思われる私見などはありますか。

(北澤職務代理)

一番は、学校に行かれないお子さんが現実に目の前にいるという保護者やご家族の皆さんですね。本当に誠実に対応してくださっているご家族や保護者の皆さんらとお話していて、夜も眠れないくらい「どうして行かれないのか」というようなことで悩まれているっていうことも何度も出会っています。

それは、「この先どういう状況になるんだろう」とか、「このままずっと行かないでいるんじゃないか」とか。そうすると、今三浦委員がおっしゃったような、学力もついていかないし、それから社会、学校社会ですけど、とも関わっていないというふうになって、結局将来の不安。具体的には、「高校進学どうなっちゃうんだろう」というようなことを必ず口にされる。やっぱり大人なので、社会経験があると人生の先がある程度見えるので、余計「この状態でうちの子がこのままいったら、この子の将来はどうなるんだろう」というような不安で本当に親御さん自身も悩まれるということが起こってくる。

ところが、多くのお子さんに関わっていると、さっき風を送り続けると話しましたが、とにかく定期的に、もし行き会えないときでも例えばお手紙を届けるとかいうふうにしながらかわらわらずと続けてくると、本当に不思議に、中学3年生の2学期ぐらいになると、それまで動かないでいた子が動き出すんですね。さっき言ったさなぎの状態でも、動かないように見えていたんだけど、でも内面はいろんなことを考えて、いろんな外の空気や風を、情報を取り入れていて、動き出すというケースがいっぱいありました。

それでその後、自分にあった学びの場所はどこだろうというふうを探って、全日制では厳しいけれど定時制でとか、または全日制なんだけど通信制を選ぶとか、いろんな自分に合った学びの場所を選んで次へ踏み出していくというケースがほとんどです。

先ほど見せていただいたこのデータには出ていないですけど、市のほうでは卒業した半年後のお子さんたちが今どういう状況にいるかという調査をずっと継続してきているはずですよ。

そうすると、中学3年生のときに長期欠席で卒業したお子さんたちが50人前後いたとして、その内の40人近くが進学をしているはずですけど、その40人ぐらいの半年後を見ると、半年後の段階で中退してしまったとかっていうお子さんはほとんどいないですね。ほとんどのお子さんは、「選んで歩み出した学校で適応して、現在も頑張っています」という学校からの回答がほとんど。

私は、その数字がすごく自分の中では励みだったんですけど。だから、義務教育終わるまでの段階はそうやっていろんな人の支援も必要でやってきたけど、自分で選んで一歩踏み出したその高校では、半年経った段階のところでは、本当に頑張ってくれているっていうのを見たときに、中学校のときに学校になじめずにいるような状況ではあっても、そこをいかに上手に風を送り続けて次へ踏み出させてあげるかという、そこがポイントだというふうに思っています。

さっき三浦委員が、要はソーシャルスキルのようなものを培う部分と、それから、基礎学力の部分という話をされました。私は、まさにその2つは、たとえなじめずに学校へ来れずにいる状態でも、とても大事だというふうに思っています。

だから、学校に来れない状態であっても、お手紙を届けるときに、その親御さんやその子と相談して、どういうことだったらお家なり別の場所でできそうかということの様子を見ながら相談をして、それで、例えば学習プリントをうんと優しいものから届ける。それで、できていたのを、伊藤委員がおっしゃっていましたが、まさに、「褒める」というとちょっと上から目線で嫌なんですけど、「いやあ、よく頑張ったねえ」というようなことをやりながら繰り返していきます。

さっき社会的自立という話をしましたが、例えば、飯田・下伊那でその社会的自立、将来就労して生活していくような力をとというような具体的なことを考えたときに、高校卒業の資格と、それから運転免許があるかないかというのは、社会的自立をしていく上でとても重要なポイントだというふうに思っています。

要するに、いざ本人がエネルギーがたまって改善してきて「さあ一步踏み出そう」となったとき、1つは、運転免許が取れる程度のやっぱり基礎学力ですよ。それがあるかないかによって、その後の踏み出せる範囲が非常に違ってくる。行動範囲も違ってくるし、行動範囲が違うということは、出会える職業や勤められる職場やそういうものも非常に違ってくるということですね。

それから、求人広告やなんかを見ると、資格のところ、細かい資格はいらないけれど高卒以上と書いてある状態に多くの場合なっていますよね。というふうなとき、本当に具体的に考えて社会的自立を促していく一番のポイントになるのは、さっき言った高校卒業資格と運転免許証があるかないか。それぐらいのところまでは行ける学力は、たとえ教室での学びじゃなくてもつけようねという話は、本人への目標としていつも私は伝えてきました。

そうすると、多くの場合は、それでプリントやなんかをお届けすると頑張ってくれます。もちろんできないときもありますけどね。そういったところからの支援は、やっぱり最低限必要かなということだと思います。

(三浦教育委員)

今のお話お聞きしていて浮かんだ言葉は、ニュースで聞いたんですけど、8050という言葉で、80歳と50歳の世帯ということで、80歳の親に50歳の子ども、閉じこもりという問題、社会問題についての言葉だそうです。

そんな言葉なんですけど、社会的な自立をしている年代にあって、そういう状況でないように私たちは子どもたちを教育していかなければいけないと思ったときに、今のような対応というのは本当に大切です。社会に出ていく社会的自立、一定の学力をつけてちゃんと自立できるようにして社会に出す、そんなところの責任は私たち教育委員会といったところがしっかり押さえていかなければいけないんだろなあということを感じました。

(今村教育次長)

ありがとうございました。市長いかがですか。

(代田教育長)

市長の前にちょっとだけいいですか。

(今村教育次長)

どうぞ。

(代田教育長)

ちょっと違う視点で、この問題をもっと俯瞰的に見る必要があるかなあというふうに思っています。

まずは、これは飯田だけの問題じゃないということです。飯田だけ高ければ飯田の対応という形になるんですが、日本全体の問題であって、学校の先生も全国の教育委員会も一生懸命頑張っているけれども全国的な問題になっているというのが1点です。

じゃあ、これがいつから始まったかというのを時系列で見る必要もあるかなあというふうに思っています。ちょうど平成が始まった1991年の段階では不登校6万人なんです。で、児童数も多い。要は児童生徒数が過去最小に近づいているにも関わらず不登校が最多になっている。

というのは、文部科学省の調査で14万人というのが平成27年度の調査にありましたけれども、先日のNHKの調査で、30日とかいうわけではなく教室に入れられないという定義で不登校をとらえると、44万人いるんじゃないかというデータもあります。

ですので、要は時代的な流れ、そして学校が頑張っているにも関わらず増え続けている現状というのをもう少し俯瞰して客観的に見る必要があるだろうというふうに思っています。

というのは、各論のところと、もう1つはやっぱり制度的、仕組み的なことも必要だという意味なんです。本当に全員、個に寄り添うのがいいのかもしれないんですけど、それは社会的には難しいといったときに、制度的な、仕組み的な問題をやっぱり大きく解決していく必要があるだろうというふうに思います。

ここで1つ問題になっているのは、「不登校は問題行動ではない」と文部科学省が2年前に定義をしっかりと出して、大きな流れをつくってはいるんですが、実際には14万人の不登校のうち出席扱いになっているのは14%です。残りの86%の子どもは出席扱いになっていないので、内申点が記載されずに、要は進路の選択が非常に狭まっているという現状もあるわけです。これがまさに制度上の問題で、要は不登校になってしまうと、現状で言うと8割以上の子どもたちが何かしら高校進学においては不利な状況になっている。

こういうことを解決しながら、不登校、中間教室、学校以外で勉強をしたところにおいても、しっかり次の道筋をつけてあげられるように、繰り返しになりますがこれは制度の問題、仕組みの問題なので、こういうことも合わせて考えていかないといけない。

個々の対応は非常に大事だと思いますし、学校がもっともつとよくなって不登校を生み出さない学校になることは大事だと思います。でも、それをやっていなくてということだったら修正がいるんですが、一生懸命やっての結果ですので、もうちょっと広い視点、長い視点で解決する必要があるんだろうなあ、そんなふうに考えています。

(牧野市長)

今の話はちょっと重要なんだけど、制度的仕組みとしてどういうふうに変えれば不登校はもっと減るのか。カリキュラムが悪いということ？

(北澤職務代理)

私はカリキュラムが悪いというふうには思っていないです。むしろ冒頭にも申し上げたように、教室での学びでいける子もいれば、教室とは違う場所で、もうちょっと少人数でとか、または自分に合ったペースでとか。ということが考えられる学びの場所がどれだけ提供できるかという部分のことかなあとというふうに思っています。

(代田教育長)

私もよろしいですか。北澤職務代理が冒頭申したマラソンの話に例えると、40キロ走ったときに、早い子は2時間、遅い子は4時間でも到達できないっていうのは、マラソンで例えると非常にわかりやすい。にも関わらず、学校の学びということで言うと、小学校1年生の7歳から12歳まで、同じ教室で皆同じ教科書をだんだん積み上げていくというのは、マラソンを走らせていることに例えれば、自分のペースで走れていない子ができてもそれは当然じゃないかなあと。そういう意味でカリキュラムが悪いというよりは、そういった選択肢、自由なペースでできる、到達点を自分で設計できるという点において課題があるかなというふうに考えています。

(牧野市長)

それはカリキュラムということではない？例えば、6年と3年というふうでなくて、むしろ9年間を全体として見て、その中でペースをつかんでいくとか、あるいは逆に飛び級を認めるというように、要は同一学年にしなくていいとか、そういうふうに関心を持っていただければいいかなと。

(代田教育長)

それも1つの解決策だと思います。カリキュラムというと学習指導要領の学習内容というふうにとらえるので、その内容自体には私は問題ないと思っているんですが、その中でどの習熟度においてやれるかということが柔軟に対応できていないんじゃないかということです。カリキュラムの内容そのものに問題があるというふうにとらえていないという私の表現です。

(今村教育次長)

今、制度の仕組みについてということから議論をいただいているんですが、この部分をこう変えたらどうだという提案を含めて発言はありますか。

(北澤職務代理)

学習指導要領そのものが現段階でどうのこうのというところまでは私は全く考えていなくて、元は学校の中にいた人間なので余計そういうふうで考えてしまうのかもしれないんですけど、学習指導要領を是としたとき、その学びの方法とか、その場所とかといったようなことはもう少し柔軟に考えることができるんじゃないか。

現実には、去年の4月ぐらいですか、文科省のほうからも、教室や学校以外の場所で学んだことも校長がそれに準ずる学びをしていると認めれば登校扱いするように、というふうに変ったんですけど、実はその試案というのは、もう平成16年ころに出ているんですね。結局15年近くかかって、その試案がだんだん現実とマッチしてきたというか、そういう柔軟性のあるものを認めていかざるを得ない状況になったという失礼ですけど、やっぱり社会、時代の流れ。それから、子どもたちや社会のあり方と、従来学校で登校と認めていたものが整合しない部分がだんだん出てきた。

それがだんだんこの時代に整合するように、例えば、去年の4月にそういうふうに変ったというようなことだと思うんですね。この間15年近く要しているんですけど、変わっていくというのはそういうことなのかなあというふうに思います。

元の話へ戻ると、これからの飯田市のことの解決という言い方ではなくて、新しい時代に入っていくということを考えたときに、学校はもちろん頑張っしてほしいし、これからも続いてやっていくんですけど、その本体になかなか行かれないというお子さんたちがだんだん増えてきている。その本体とはちょっと別のところで動いている、そのお子さんたちにも対応できるような場所とか人とか、機会をやっぱり設けていくということは大事なことなのかなあと。

具体的に飯田市の現状で言うと、学校になじめないでいるという、校内中間教室、それから、市の中間教室、それからNPOでフリーウイングというようなところが選択肢になりますよね。

あとは、農園の農業体験、例えば千代の太田いく子さんのところとか、動物園で体験したようなお子さんたちも知っています。

学校へ登校する代わりにそういうところへ行ってエネルギーをためさせてもらって学校に戻れた子もいますし、しばらくは戻れないでいたけど、中学卒業ごろに話を聞くと、「太田さんのところへ行って大事にしてもらってとっってもうれしかった」という話を話してくれたり、「卒業できました」「高校も決まりました」といって出向いてお礼に行った子もいますし、お手紙を書いた子もいる。

というふうに、ちょっと時間はずれていくんだけど、でもさっきのエネルギーをためる話とかそういうものがこの中に全部凝縮されているのかなとそんなことを思います。

(今村教育次長)

ありがとうございました。エネルギーをためるために、学びの場を柔軟にということだと思えますが。

(三浦教育委員)

学業といいますかカリキュラムの話でいうと、学業不振ということで学校から足が遠のいているといった部分には確かにそういうお話だと思いますが、人間関係だとか友達とのコミュニケーションとか、そういったところに問題があって学校にちょっと足が向かないといったところでは、やはりそういった関係性が築きづらいといった部分をサポートしていくといったところが大切なんじゃないかなあと。

さっき「多事争論」というお話もありましたけれども、私としては、44万人の不登校といいますか、そういった子どもたちがいるんだというお話はありましたけれども、でも実際に飯田市で顔の見える子で、不登校が小学生42人、中学生83人。こういった子どもさんたちの顔を見ながら、やはり個別にどうなのかといったところの視点、これは本当に重要じゃないかなと。

それぞれがそれぞれ、学校に足が向かない理由というものがきちんと存在するんじゃないかなというところは思います。

(今村教育次長)

ありがとうございました。

(牧野市長)

上村の特認校というのはどういうふうにとらえていますか。自分の地元の中学、小学校でなじめないような子がそういうところに行くのであれば、という感じなのか。

(代田教育長)

上村特認校は昨年度から始まって人数も増えています。来年度の説明会にも8家族くらい希望してきています。

その中で、教育委員会として、1回意思確認をさせていただいているのは、「今の学校が嫌なので上村へ行くんですか」ということと、「上村に、上村の教育に魅力があって行くんですか」ということ。この質問をしたときに、「今の学校が嫌だから上村に行きたいんです」ということだけの理由はお断りさせていただいているんです。

要するに、もちろん2つの質問に対する明白な線引きというのは難しいかとは思いますが、やはり上村の魅力をしっかり知ってもらって、その中で、ちゃんとお互いを認め合う、いじめのない学校をつくっていきたいんだということは大事だと思うので、そこの意思確認はさせていただいてはいます。

ただ、今の市長の質問で言うと、「今の学校がなかなか難しいので希望できませんか」という問い合わせは、それ以上にあるというのが現実です。

(今村教育次長)

まだ議論は尽きないと思いますが、社会的自立あるいは学力の向上に向けて、心のコップに水をためながら、風を送り続けることが大切だとか、そういう個々の対応、あるいは制度・仕組みの見直しも必要じゃないかということが意見交換されたと思いますが。

(牧野市長)

北澤職務代理にお聞きしたいんですけど、中間教室とかだと不登校扱いにはしないというのはおそろしくしやすいと思うんですよ。

そのほかの、「地域に出ていく」、それこそおた農園に行ったりとか、そういうところに行くと、まさにそこが居場所になるわけでしょう。

今、職務代理がずっとおっしゃっていた「自信を持たせる」。自分が通った教室だけがあなたの社会じゃなくて、もっと広い人間関係に入れてもらえれば、「ああ、こういう考えがあるんだ」とか、あるいは「こういう見方もあるんだ」とかいうふうに、いろいろ見ているうちに、自分を肯定してもいいんだと思えるというのは、学びじゃないんですか。つまり、そういうのも不登校扱いにしなくたっていいんじゃないか。

要するに、何を不登校扱いにするとかしないとかというその基準はあるんですかね。

(北澤職務代理)

じつは飯田市では、登校扱いについての文書を必ず4月1日付けで各学校に出して、今市長が言われたようなことも登校扱いとしています。

というのは、今言ったような、おた農園さんや、それから、例えばNPOの「フリーウイング」や、そういうところに行って居場所としてしばらく学んでエネルギーをためる。学校とは別ですけど、社会性を身に付けたり、自分は何かって探っている学びをしていることも、登校に準ずる大事な学び、特に社会的自立に向かってということではとても大事な学びをしているというふうに判断できますので、それは飯田市では登校扱いになっています。

(牧野市長)

さきほど親御さんもみんな悩んでいるという話がありましたよね。そういうことが知られていないということはありますか。

(北澤職務代理)

いえ、教育支援指導主事の皆さん中心に、親御さんにも、「学校だけじゃなくても、こういう場所がありますよ」ということを提示しています。その幾つかの選択肢が提示できることは、実は支援指導主事にとってもとてもありがたいことで。

ここしかないという話ではないので、幾つかある中で、お子さんによってはその幾つかを全部体験で行ってみて、「自分はなんとなくここが一番、しばらく来れそうだ」と言って行っているようなケースもあります。

さらに、新しい時代に向かってということになれば、例えばネットを使っての学びというようなことも、これからはもっと提供できる場があってしかるべきというふうに思います。

(牧野市長)

とすると、このグラフの見方というのは、不登校児童生徒数の推移とありますけど、それはいわゆる地元の学校に行っているか行っていないかという数字だけで、イコール学べていないというわけではないわけですよね。

(北澤職務代理)

そうです。

(牧野市長)

そうすると、本当に課題があるのは、そういう学びすらできていなくて、簡単に言うと家庭で引きこもってしまっていて居場所が見つかっていない、そういう子どもたちは一体どのくらいいて、そういう子どもたちは増えているのか、減っているのかという、その数字があるかどうかなんじゃないかという気がするんですけど。

要するに、不登校という見方自体が、そもそも悪いことじゃないと言っているんですから、そういう、数字の把握としてはわかりますけど、本当の問題はその中身だということなんじゃないかと思うんです。その数字はあるんでしょうかね。

(代田教育長)

それがやっぱりなかなか難しいんです。要は、「NHKが調査すると」とかという形になるので、不登校の定義自体が難しいんですけど。

その一方で、やっぱり学校に来ないと学力の遅れ、社会性の欠如。要は、不登校は問題行動としないけれども、やっぱりしっかりと学力と人間関係づくりは、その裏で保証していく必要があるというのは文科省も言っているので、不登校が是だとしても、そのペースで学べる学びというのは学校教育の中でもやっぱり保証していく必要があるだろうと。

(牧野市長)

いや、そのところを問題にしているんじゃないで、要は、本当に大事なところの把握ができてい
かどうかという話だと思うんですね。

不登校は問題行動ではないということを言っているということは、じゃあ何が問題なのかという話の
把握が必要で。

今の職務代理の話を知っていると、不登校自体は問題じゃなくて、要するに、自分の居場所がちゃ
んとあって、そこで学んでいるかどうかの確認がちゃんとされていて把握されている。要するに、さな
ぎの状態なのか、本当に「これはまずいぞ」という状態なのかというものの見極めがちゃんとされて
いるかどうかなんじゃないのかなと、私は皆さんのお話聞いてそういう気がしたんですけど。

それはじゃあどれくらいで、そういう子どもたちが増えているのか減っているのかという話は、や
っぱり本質としてあるんじゃないかと思うんですけど。

(三浦委員)

そうだなと思いました。

なので、例えば本当に手が入っていない、全く誰も手をかけていない、そういった子どもさんがど
のくらいいるのか。それで、実際に手をかけてはいるけれども出て来ようとしていない、どこにも出
てこない、そういった子どもさんがいるのか。やはりこのデータを押さえていくということが大事だ
なあと。

(代田教育長)

それで言うと、支援指導主事の先生が全部で19人いる中で、ほかの市よりはかなり綿密に、今30
日以上通えていない子、30日以上通えている子、中間教室に行っている子、それぞれはかなり把握
したデータは持っていますので、把握していないと言われると…。

(牧野市長)

いえ、把握していないから問題だと言っているんじゃないで。

そうではなくて、それがあつたうえで、最終的に実はここら辺が一番大きな課題なんですという
があるのか。支援指導主事の皆さん方の対応の中で、実はこのぐらいの子たちが将来的に、さ
っき8050って話もあつたけれど、要は20代・30代どころか、40代・50代になつても引きこ
もる可能性が出てくる子どもたちが、実はここにあるんだっていう。これを何とかしなきゃいかん
というところがわかっていっているかどうかだと思うんですけど。

(今村教育次長)

データの取り方というより、さなぎの状態であるかどうかということの見極めをどうやっていく
のかと。

(牧野市長)

まさにその見極めの話だと思うんですよ。この子はさなぎの状態、今学んでいるというふう
に支援指導主事の皆さんが見ているのは、はっきり言って問題じゃないわけですよ。確かに
いろいろ、さきほどのゴール地点をどうするかという学校の話の中の課題はあるか
もしれないけれど、その人個人にとっての問題じゃないと思うんですよ。

問題は、さなぎじゃない、要するに心が凍っちゃっているような状況、壊死したよ
うな状況。そんな

状況になっちゃっている子がもしいるとしたら、そこをどうするかという話。

そういう子がいるのかどうかとか、どのくらいいるのかとか、そこら辺の見極めをどうしていくとか、そういう話なんじゃないのかなと。

(北澤職務代理)

今、とても大事なポイントを本当に鋭角的に打った話をしていただいたんですけど、実際関わっていると、私たちはなかなか家庭の中まで入っていくということができない。学校サイドからいくと限界があるので、そこから先の部分はやっぱり子育て支援課の皆さんの力を借りたり、子ども家庭応援センターの皆さんや、それから、一番はSSW（スクールソーシャルワーカー）の皆さんですが、そういう方が家庭の中まで入って、むしろお子さん本人よりも保護者の方とうんと関わっていただいて。

(牧野市長)

例えば民生児童委員とか、地域の世話役の方とか、そういう皆さん方とも連携して、要は家庭自体の問題っていうものをどれだけ把握しているかという話になるんですかね。

教育支援指導主事と民生児童委員との連携はどんな感じなんでしょうか。

(北澤職務代理)

個々の学校では連携はとっています。それから、子育て支援課のほうのでも。

(牧野市長)

ケーススタディー的な話もある程度されている？

(北澤職務代理)

しています。ただ、そういうふうにはできる件数も、時間的にも限られてくるので、それがすぐに全体に効果を発揮するというふうにはなかなかいかないというところはあるかと思います。私も今は担当じゃないのでわからないんですけど、今までの経過だとそういうことだと思います。

(今村教育次長)

次のテーマもありますのでそろそろ…。今日結論を得るとかまとめるということではないんですが、この議論の中で、どういう視点が大切かという点と、さらにこうした新しい視点が大切じゃないかということが、気づきという意味でありますので、今日はこの件については一旦ここまでにさせていただいて、教育委員会事務局としても受け止めて取り組んでまいりたいと思います。

(2)「中学生期におけるスポーツ活動のあり方」について

(今村教育次長)

2つ目のテーマに入ります。終了時間が決まっていますので、2つ目のテーマ、不十分になるかもしれませんがお願いします。

『中学生期におけるスポーツ活動のあり方』について」ということで、事務局のほうからポイントのみ説明をお願いします。

(桑原学校教育課長)

それでは、資料の続きで資料No. 2-1の1ページからお願いしたいと思います。「平成30年度部活動等の調査結果概要」です。

ここでは、4番の生徒の活動状況をご覧いただきたいと思いますが、「自主練習」、「部活」、それから、部活動の延長としての社会体育活動を実施している生徒の年間活動時間の平均が665時間だという結果でございます。その下、顧問の活動状況につきましては、619時間平均という数字が出ております。

2ページは、その調査の方法、それから、国の活動時間の上限の考え方、それから、部活動の延長として行われている社会体育活動のことが書いてありますのでご確認くださいと思います。

3ページは、中学校別・部活動別の所属者数ということでございます。9つの中学校、それぞれ部活の男子・女子別の所属の人数をまとめた表でございます。

その下の※印2の活動時間をご覧いただきたいと思いますが、平均については、先ほど665時間と申し上げましたが、中には900時間、それから1,000時間を超える活動を行っている部活もあったということでございます。参考までに、年間の総授業の時間は、約850時間ということで、それ以上活動していたところがあったという結果でございました。

4ページは、これは6月16日に行われたコーディネーション理論に基づいた講演会、荒木先生に来ていただいたときの、聞き取りのメモでございます。

「長時間の運動というのは本来体によくないんだよ」ということ、それから、「同じ運動時間でも強制的にやっていると逆に脳が萎縮してしまうんだよ」とちょっと衝撃的なお話をいただきました。こういった部分、アンダーラインを引いてあるところをご覧になっていただければと思います。

次のページは、部活動のあり方について、見直しの説明の資料でございます。見直しの背景、目指す姿はご覧のとおりでございまして、新たな活動基準に関して、大きな変更点とすると、中央部分に記載してございます「保護者の迎えがなくても安全に帰宅できる時間までの活動が望ましいという考え方を示したこと」、それから「部活動の延長として行われてきた社会体育活動を廃止」という方針を出したことでございます。

これにつきましては、来年8月末まで施行期間で、2020年9月からの完全移行を目指すということでもあります。

その下に、「施行期間の取組」とありますが、これは後ほど生涯学習・スポーツ課長のほうから説明をしていただきます。

次のページは、休養日、時間の活動基準でございますので、ご覧になっていただきたいと思います。以上です。

(北澤生涯学習・スポーツ課長)

それでは、ページをめくっていただいて、「中学生期のスポーツ活動関係者会議概要」、こちらは6月28日に開催されました。

この会議につきましては、「施行期間における中学生のスポーツ活動の受け皿の例示ができるアイデアを出し合う」ということで、活動方針も含めて、スポーツ団体としてどのようなことができるかという趣旨で開かれました。

参加人数はご覧のとおりです。会議は、市としてのイメージを提出して、競技団体からいろんな課題も含めて話していただくということで、課題やどんなことができるかというアイデアを出すといった感

じです。

新聞の記事のほうですが、こちらもまたご覧をいただければと思います。

今後こういう会議を引き続き実施していきたいというところでございます。以上です。

(今村教育次長)

ありがとうございました。ちょっと時間の関係もあって飛び飛びの説明になりましたが、現状等を説明させていただきました。

それでは、『『中学生期のスポーツのあり方』について』ということで、ご発言をお願いいたします。
伊藤委員。

(伊藤委員)

ちょっと大きな話になりますけれども、日本の教育の中で部活と給食と掃除は世界にあまりないということ。給食は発育時に非常にありがたいということ、それから掃除は、この前のサッカーワールドカップのときには世界にも評価された。

それからこの部活なんです、日本は学校中心型で今までやってきたんですが、今、話に出されているのは、「学校と地域と両方型に持っていったらどうか」という話です。

そうはいつでも部活はなくなるわけではなくて、部活は残して延長の部分をどうするかという話なので、私はこの考え方というのが、若い中学生がこれから社会の中にだんだん入っていくときに、1つの非常に良い方向性になるんじゃないかなというふうに思っている。

といいますのは、学校から社会スポーツのほうに入っていくときに、社会との交わりができる。

今、中学校区で頑張っって受け皿をつくっている、そういうところもありますけれども、そこにこだわることなく、先ほど説明ありましたように、飯田市の体育協会のいろんな団体のジュニア部門ですかね、そういうところにどんどん入っていきもらって、中学校区以外でも飯田市のそういったスポーツの種目を通して人と交わっていくと。

それから、もう1つお話ししたいことは、今、部活でスポーツのことが中心になっていますが、これは芸術文化も同じで、例えば音楽にしても絵にしても、もっと言うと、女子のスポーツへの興味が薄れているということなんです、例えばダンス、社交ダンスじゃなくても今風のダンスでも、そういったところにも女子がうまく入っていきけるような。そういったところで社会とのつながりをつくっていくんじゃないかと思います。

クラブスポーツ、そういうところでしっかり応援したいなあという思いであります。

(今村教育次長)

ありがとうございました。ほかの方いかがでしょうか。どうぞ。

(北澤職務代理)

もう時間も押しているんですけど、私も今の伊藤委員の話と基本的には同じ思いなんです。

結局、今までの部活動ということで見ると、そもそもスポーツを学校へ部活動ということで下ろしたという国の方針もあると思うんですけど、学校プラス長野県の場合だと社会体育というものがある。

私の認識不足で、ついこの間まで社会体育というのは全国的に行われているものかと思っていたら、これは長野県だけの全く独自のやり方だということを知って、ちょっと自分が狭かったなあと思ってび

っくりしたところなんですけど。

どちらにしても、学校での部活動も、それから社会体育も、ある時期においては一定の役割は果たしてきたというふうに思うんです。けれど、それが加熱してきたということもあるし、これからの時代ということを考えていったときに、同じメンバーがほとんど変わらない状態になる社会体育というあり方は、言葉は悪いですけど、ある意味閉じた活動の方向だと思うんです。やっぱりこれからのあり方としては、もうちょっと開いた活動のあり方。

でも、いっぺんに全部変えるわけにはいかないもので、学校での部活動は従来どおり残しながらだけれど、いわゆる社会体育というところで行われていた活動を、これからはもうちょっと多様な人と、多様な場所で、多様な種目を楽しむというか行う。そのことによって、将来にわたってスポーツを楽しんだり、健康づくりとか、それからコミュニティーづくりというか、仲間、人のつながりも広がるというふうに思うんですよね。

そういうふうな枠組みに変更していくことで、さっき伊藤委員もおっしゃっていましたが、もっと言うと地域コミュニティーの文化にもつながって、文化づくりというか、そういうようなことにもつながっていくことじゃないかなあというふうにとらえています。

そういう見方をしてみると、実はさっきのテーマ1のことで枠組みは本当にあんまり変わらない、同じ枠組みなんじゃないかなあ。つまり学校っていうところで、あまりにも抱えすぎているものを、やっぱりもう少し地域の力やいろんな多様な人とのつながりを使って認めていきましょうというか、やっていましょうという枠組みにおいては同じことなんじゃないかなあというふうに思います。

そういうことを私たち大人のほうが理解していくと、これは学校にあったものをただ地域へ移しましたとかというそういうレベルの話じゃなくて、本人にとってはもちろん可能性が広がるし、学校にとっても本来の機能を取り戻すことができるし、それから、地域にとっても人のつながりや地域コミュニティーの形成につながっていくしという、全員がWin・Winになるっていうか、そういうような見方をこれからしていく必要があるんじゃないか。

そして、「受け皿」という言い方はあまりよくなくて、そういう枠組みをこれからはつくっていく方向で、みんなで共有・理解していく必要があるんじゃないかというふうに思っています。

(今村教育次長)

ありがとうございました。ほかにはいかがでしょう。小澤委員、どうぞ。

(小澤委員)

「部活動の見直しが行われますよ」というお知らせ、保護者にはまずやっぱりいつているようなので、数人のお母さんたちと話をしてみると、やっぱりいろんな方がいらっしゃるのでもちろん意見がもちろん出てくるんですが、「物足りん」「こんなじゃだめだ、強くならん」というお母さん、お父さんがいれば、「今までやりすぎだったんだに」、「だけど、これはやらなさすぎ」「もうちょっとやれるといいのになあ」とかっているのも。

そのために、この地域のスポーツということになるんですけれども、そうすると送迎が必要になる。「働いているお母さんたちは送迎できん」という、「どうしたらいいの」という意見が出たり、あとは「家へ帰ってきて何もすることがないよりは、少しは運動していたほうがいいいな」くらいの方はこれでいいと思うんですが、やはり「やるからには勝ちたい」「中体連で上位に行きたい。」とか。

いろんなスポーツクラブでやったとしても、学校の名前を背負っていないと上には行けないというこ

とになると、やはり大会自体から考えていっていただかないと困るんじゃないかな、うまくいかないんじゃないかなと。

それから、前も教育委員会定例会でお話したんですが、やはりこれは県から話が出ているものなので、ほかの村や町とも足並みをそろえていかないと、大会に行ったときに「あの村はとても強い」「こういうふうに練習している」というのもおかしなものだと思うので、足並みをそろえていくのが大事ななあと思います。

個人のスポーツはいいんですが、部活動によっては、団体スポーツになると、「地域ではこういう人たちとやっているんだけど、中学の大会になると違うメンバーでやらなきゃいけない、その練習ができないのでそれも困るんだに」というお母さんもいました。

(今村教育次長)

ありがとうございました。ほかにはいかがですか。

(三浦委員)

私がこの問題でとても考えるのは、今までの先生方の業務の負担というところですよ。

OECDの調査に「日本の教員は労働時間は一番長い。でも、授業をやっている時間は平均以下だ」と、そういったような調査結果もあったりして、そうすると、こういった働き方改革と、こういったスポーツ、部活動のあり方というものは切っても切り離せない。

先生たちの仕事の改善ということじゃなくて、改善することでスチューデント・ファースト、やっぱり子どもたちの教育というところにきちんと還っていく、本来の学校での教育といったところにちゃんと力を入れてもらう。

お母さんたちの中にも「今までやりすぎだったんだに」と言っていたお母さんもいらっちゃったということをお聞きしましたけれども、実際本当にそうだったというところをきちんと認識して、やっぱり今このときにきちんと整備していくといったところが必要だなということ、そういった視点からとても思うところですよ。

(今村教育次長)

ありがとうございます。ほかの方、いかがでしょうか。代田教育長。

(代田教育長)

今、市政懇談会に回っているんですけども、地域で小学生や中学生の発表があります。

まだ半分の地区が終わったところですが、その中の3つの地区で中学生からの発表があつて、「飯田市はやりたいことができない地域ではないか」という訴えがありました。その子どものやりたいことというのは、やりたいスポーツ、「サッカーをやりたいんだけど、部活動がなくなってしまう。こういう環境は寂しい」という訴えがありました。教育に携わる者としては真摯に受け止めて、これはやっぱり何とかしなきゃいけないなあと思っています。

実際に、今、サッカー部のない学校3校を含めて、どんどん子どもたちの集団競技の選択肢がなくなっているという現実があります。

それでじゃあ部活動をつくるかという、それはまたたぶん議論が違ふんだらうと思います。各学校で、「じゃあ一生懸命部活動をやるか」というのではなくて、先程来、伊藤委員、北澤委員からありまし

たけれども、そのもう1つの選択肢、環境を、地域で、飯田市全体でつくるということは可能なんだろうというふうに思います。

そうやって考えると、まさに北澤委員がおっしゃっていただいたとおり、不登校の問題とかなりかぶるんです。つまり学校の役割というものが、大きな時代の中で、不適合を起こしている部分がある。つまり集団スポーツを受け皿にできるような人数の多い学校の仕組みではなくて、もう少人数になった学校では集団競技を担えるような時代じゃなくなってきたんだと。

かたや、ちょうど不登校が増え始めた1991、1992年の話に戻すと、Jリーグが始まりました。このときに地域スポーツなんかどう成功するんだって多分みんな思ったと思いますが、今、地域のスポーツが、サッカーをはじめ、今度はバスケットに移り、すごく成熟し始めているのも事実だと思います。

こういった社会的な成熟してきている部分と、学校が追っていく部分を十分整理しながら、学校の役割は何なのかということの中で、この部活動の議論も、さらには不登校の議論もしていくんだらうなあというふうに思っています。

そのときに、先ほども「不登校をどうするんだ」という話になったときに、解決策は地域の中にあるかもしれないし、飯田市全体で考えたときに出るかもしれないなあ。その議論をトップダウンで考えるのではなくて、3年目を迎えたコミュニティ・スクールの中で、学校の役割は何なのか、そして学校の役割の本筋の中でできないこと、これをみんなで考える。そういう時代の中で、コミュニティ・スクールがうまく機能していくといいなと、そんなふうに考えています。以上です。

(今村教育次長)

ありがとうございました。市長どうぞ。

(牧野市長)

小澤委員がおっしゃったように、この話って、どれが正解という話ではなくて、選択肢が多いほうがいいに決まっているんだけど「じゃあどこまでできるの」ということだと思うんですね。

そもそも子どもたちが何をスポーツとしてやりたいかというのは、子どもたちからどういうものに興味を持つかによってだいぶ変わってくるもので、「個人競技で俺は頑張りたい」という子も出てくると思うし。集団競技も、昔はテレビで野球ばかりやっていたので、「やっぱり野球やらなきゃ」みたいな感じのところはあったし、さっきJリーグの話も出て、今は「サッカーやらなきゃ」という話もあると思うけれど。

本当に力をつけて、それこそ全国で勝ち抜きたいという思いを持ってやっている子どもをどういうふうに伸ばすかというのは、やっぱり指導者の話になるので、学校の範疇を全く超えていますよね。恐らく、学校の先生方に「全国大会で勝てるような子どもを育ててくれ」というのは無理だと思うんですよ。いくらなんでもその範疇を超えていると思うんですよね。

ただ、そういった子どもが出てくるとやっぱり励みになるのは事実で。

一昨日、風越高校の自転車同好会の山田選手が全日本選手権で優勝してその報告を受けたんですね。全日本選手権で優勝するって実は大変なことで、この地域でそんな選手いるのという感じで。それも高校生ですよ。

そういう選手が出てきた背景は、彼の話を知っていると、ツアー・オブ・ジャパンを保育園のころから見ている、トップクラスの選手たちを間近で見ただけで「俺もあの世界に行きたい」と思って、そういう練習をして、そして彼もそういう意味では指導者に恵まれたと思うんですよね。指導者に恵まれて、

それで高校で全日本選手権に出られた。今度はインターハイだと言っていましたけれど。

彼の夢はと聞いたら、「TOJ南信州ステージに出て優勝することです」って。TOJを誘致した者にとっては、これ以上冥利に尽きる話はないぐらいで、私、本当に感動したんですよ。TOJを誘致して本当によかったなと思ったんですね。

何というか、そういう子どもは、もともとそういうつもりでやるので、あんまり仕組みとかは関係ないと思うんですね。部活がどうか、全然関係ないと思うんですよ。そういう子はそういう子で自分の道を持っているからその道を行くので。

そうじゃなくて、今、小澤委員が言ったように、「そうはいつでも家でごろごろしているんじゃないくて、部活をやって体を動かして、ある程度、集団競技の中から学びを持ってくれば」という、まさに学びということで部活をやるというのは、スポーツでも文化活動でもいいと思うんですけど、それは学校の中でできるものもあるかもしれないし、学校の中だけじゃできないこともあるかもしれない。

特に、今、まちなかだろうと中山間地だろうと、学校の生徒数が少ないときに、人数が集まらなきゃできない部活もあるということですよ。そういうときに、どうするかという話だと思うんですよ。

1つお話があったように、私は大会の話はすごく重要だと思っていて、結局、中体連とかそういった大会で、どのぐらい力をつけたかというのはやっぱり見たいので、それを目標にしていきたいということは、つまり子どもたちの目標はちゃんと作ってやらなきゃいかんと思うんですね。

中体連の場合だと、複数の中学校が一緒の合同チームでもいいよというふうに変ったとは聞いているんですけど、それでも難しいというのであれば、じゃあ飯田の大会では、りんごん方式じゃないですけど…りんごんの場合ですと、地区で出るのもオーケーですし、小学校の部で出るのもオーケーですし、自分たちのグループで出てもいいですよ。それこそ中学校の部活で出ようが、地域のスポーツクラブで出ようが、もうとにかく総当たり戦でいきましょうみたいな、そんな大会があればそれでいいのかとか。

私は、それが市でできるんならやっていってもいいと思うんですよ。そういった目標が欲しいというのであれば、そういう目標で目指そうと。そこから上の大会に行くか行かないかっていうのは、さっき言ったようにまた別問題だと思うんですよ。

もちろん全国大会まで行けなきゃだめだっというんなら、それは良い指導者をどういうふうを選ぶとかそういう話からしないと。やっぱり別の話だという気が私はするんですよ。

もう1つ、この話をずっと聞いていて思うんですけど、最初の話に戻るんですけど、子どもたちがどういうきっかけでこういう部活をやりたいと思っているのかというところが、実はあまりわかっているようでわかっていないんですね。

そこは、やっぱりテレビの影響とかそういうので、野球・サッカーをやりたいという子もいるかもしれないけれど、実は本当は気がついていなくて、さっきの自転車同好会みたいに「本当はこういうのをやってみたいんだけど、なかなかそういうものをやれる活動がないんだよ」という話なのか。

あるいは、「ある中から選べといたら選べないので困っている」とか。私も代田教育長と一緒に市政懇でお話は聞いているんですけど、結局、バスケットやりたい子がそれができなくなったら、それは悲しいですよ。そうしたら、やっぱりそれは地域の中でちゃんとやれる環境を整えてやりたいとは思っているんですけど。

そうすると、例えば小学校でいわゆる少年スポーツクラブをやってきたような生徒で、中学校にその部活がないといたら、じゃあ部活のあるところに行かせてやるということ認めるかどうかということですよ。そういうことも選択肢としてはあるんですかね。

親がそれを認めるかどうかはもちろんありますよ。さっき言ったように送り迎えが大変だとか、いろいろあるかもしれないですけど、そういう選択肢というものはあるんですかねえ。

この部活の話って、いろんな思いがあって、いろんな人が、いろんなふうに言っているの、私自身も何ていうか、こうでないといかんといい思いはあまりないんですけど。

ただ、思うのは、やっぱり子どもがやりたいのであれば、その選択肢はなるべく地域の中で確保してやりたいなという気持ちはあるんです。

(今村教育次長)

ちょっともう時間が。今日は1回目ということもありますし、ちょっと中途半端なところもありますけど、よろしいですか。

(牧野市長)

もう1つだけ言っておくと、ある市政懇の中学生の発表では、彼らは「西中と東中を合併してくれ」と言ったんですよ。

要するに、学校区の話が絡んでいるんですね。実は竜東中と竜峡中の話についても、竜東の地区の中で出ています。中学生たちの思いは、そういった学区のことも含んで言っているんですよ。

(今村教育次長)

わかりました。それでは話は尽きませんが、今市長からありましたように、先ほど北澤職務代理も言われましたように、くしくも見えてきたのは、既存の枠組みでは対応できなくなっているという、そういうことが今回の共通の認識かと思えます。次回のテーマは、皆さんに相談させていただいて設定しますが、そうしたものをまた深掘りできるようにしたいなと思えます。

時間も過ぎておりますので、これで閉じたいと思えますが、何かご発言ございますか。

(牧野市長)

では最後に私から一言。

今日は本当にありがとうございました。今回やり方を変えようということで、今まではどちらかというと、「こんな流れで」みたいな感じのものを漠然とですが、持ちながらやっていたんですが、「今回はもうフリーでやってください」と。そのところはどうでしたかね。次回のやり方については、それぞれの委員の皆さん方からまた感想をいただいて、事務局のほうで考えてもらえればと思います。

今日は本当にありがとうございました。

4. 閉会

(櫻井総合政策部長)

それでは、これで第1回教育総合会議を閉じたいと思えます。お疲れさまでございました。